『西南アジア研究』No.45, 1996

ホージャ家イスハーク派の形成
——17世紀前半のタリム盆地西辺を中心に——

澤田　稔

はじめに

ティムール朝時代に大きく発展したイスラーム神秘主義教団，ナクシュバンディー（ナクシュバンディーヤ）の指導者であったマフドゥーミ・アーザム Makhdūm-i A'ẓam（1542年5月7日逝去［McChesney 1990：83, note 27；Veselovskii 1889：90］）の子孫の活動は，16世紀中葉から19世紀半ばまでの東トルキスタンの歴史を考察する上で枢要な位置を占めている。彼らは16世紀末から17世紀前半以降，タリム盆地西辺のオアシス地域であるヤールカンドとカーシュガルを主たる拠点にして，神聖な一族[1]として所謂カーシュガル・ホージャ家という宗教貴族を形成し，ひいてはその地域の政治史において肝要な役割を担うにいたる。

フレッチャー氏の概説によると，マフドゥーミ・アーザムの子孫すなわちマフドゥームザーダ達 Makhdūmzādas は，清以前の時代に東トルキスタンのナクシュバンディーヤの中で優越的な地位を獲得しており，彼らの対立する二つの系統——イスハーキーヤ Isḥāqiyya［イスハーク派］（またはカラタグリク Qarataghlïq）とアーファーキーヤ Āfāqiyya（またはアクタグリク Aqtaghlïq）——はタリーカト［教団］の指導権を求めて争っていた［Fletcher 1978：87］。

このマフドゥームザーダ達の東トルキスタンにおける最初の活動は16世紀後半のホージャ・イスハーク（マフドゥーミ・アーザムの子）（1599年9月30日逝去［Akimushkin 1976：275, note 94］）にさかのぼることが確認されるけれども，彼の伝道活動は当時の有力な政治勢力であった所謂カーシュガル・ハーン国（ヤールカンド・ハーン国）[2]からの全面的支援を背景にしたものではなかったために，その成果には限界があった［澤田 1987］。それ故，東トルキスタンにおけるイスハーク派の勢力形成にとって，ホージャ・イスハークに続く世代の活動が決定的な意義を有すると考えられる。

本稿では，イスハーク派の始祖ホージャ・イスハークの子であるホージャ・ヤフヤー（ホージャ・シャーディー）の活動を整理し，イスハークのマザールや，ヤフヤーとその子孫のマザールの所在地を闡明する。本稿の成果により，タリム盆地西部にホージャ・ヤフヤーの勢力が所謂カーシュガル・ハーン家（ヤールカンド・ハーン家）の政治勢力と結びつきながら，

どのように築き上げられていったのかが，宗教的な側面と政治的な様相から明らかとなろう。

I ホージャ・イスハークの三子とサマルカンド近郊のマザール

18世紀後半に作成されたホージャ家の聖者伝『タズキラ・イ・ホージャガーン』はホージャ・イスハークの子供について次のように述べている。

ホージャ・イスハーク・ワリー Khōja Isḥāq Walī から二人の子が残っていた。その一人はホージャ・クトブ・アッディーン Khōja Quṭb al-Dīn であり，現在この方の子孫(awlād)はバーギ・ブランド Bāgh-i buland における崇高なマザール(mazārāt[mazār の複数形])への祈禱者(du'ā-gūy)である。

もう一人はホージャ・シャーディー Khōja Shādī〈アッラーよ，浄めたまえ〉である。この方のマザール(mazār)は都(pāy-takht「王座の膝元」)ヤールカンド Yārkand に[ある]。

ホージャ・シャーフバーズ・ホージャム猊下 Ḥaḍrat-i Khōja Shāh-bāz Khōjam が七歳でアクスゥ Aqsū において死去し，[その遺体を]ヤールカンドへ運んで来ることになった時，アクスゥの人々は貴庶(ulugh kichik)みな求めて，我々にマザール(mazārāt)は記念となろうと言って，そこに[アクスゥに]埋葬した。[TKh, Institut de France, ms. 3357 : 19a-b]

史料の冒頭で二人の子が残っていたと述べられているのは，七歳でアクスゥで夭折し，その地に埋葬されたホージャ・シャーフバーズが勘定に入れられていないだけである。

1673年の初めから1676年の夏までの間にその作成時期を限定し得る[Akimushkin 1976 : 63-64]所謂『シャー・マフムードの歴史』によれば，ホージャ・シャーディー Khwāja Shādī の名で知られるホージャ・ムハンマド・ヤフヤー Khwāja Muḥammad Yaḥyā はホージャ・イスハークの三男であり，次男はホージャ・シャフバーズ Khwāja Shahbāz という名であり，両人は同腹の兄弟であった[TShM : 70]。また，シャーディーという異名の由来は次のとおりである。

[ホージャ・シャフバーズは]七歳にしてアクスゥの町(balda)においてこの無常の世から永遠の庭園へ旅立った。makhdūmzāda の死去に際し，か弱き者たちは泣き悲しんだ。アズィーザーン猊下(Ḥaḍrat-i 'Azīzān)[ホージャ・イスハーク]は仰せになった。「泣くでない。たとえシャフバーズが去ろうとも，喜び(shādī)が来る。」まもなく一子が生まれ，この貴き子にホージャ・シャーディーという名(laqab)をつけた。[TShM : 70]

要するに，ホージャ・イスハークには，長男ホージャ・クトブ・アッディーン，次男ホージャ・シャフバーズ(シャーフバーズ)，三男ホージャ・ムハンマド・ヤフヤー(ホージャ・シャーディー)という三人の息子がいたが，次男は七歳で夭逝した。

ところで，これらの息子と関連してマザール(墓所，墓廟)が言及されていることに注目したい。長男の子孫はバーギ・ブランド Bāgh-i buland(「高みの園」の意)という所にあるマザー

ルの「祈禱者」であり，次男は民人の希望によりタリム盆地北辺のアクスゥに埋葬され，三男のマザールはヤールカンドにあるという。この三兄弟のうち末弟のホージャ・ムハンマド・ヤフヤー（ホージャ・ヤフヤーとも略記する）が，タリム盆地西辺において宗教勢力を形成していくのであるが，その活動とマザールについては，第Ⅱ章と第Ⅲ章において詳述する。本章ではホージャ・ヤフヤーの生涯の前史として，その宗教的カリスマ性の源泉となったと思われる祖父マフドゥーミ・アーザムと父ホージャ・イスハークのマザールの所在地について考察したい。

そもそも，聖者の墓であるマザールが中央アジアのイスラーム神秘主義教団の活動と切り離せない関係にあることは言うまでもない。聖者の遺骸が存在するマザールがその子孫の宗教的権威の源泉であったことは，濱田正美氏により解き明かされている［濱田 1994：272-275］。それ故，マフドゥームザーダ達の宗教活動を考えるには，先ずマザールの所在地を明らかにしておくことが必要である。

次男ホージャ・シャフバーズ，三男ホージャ・ヤフヤー（ホージャ・シャーディー）のマザールは東トルキスタンのオアシス地域にあることが分かったけれども，長男ホージャ・クトブ・アッディーンの子孫が「祈禱者」であるというバーギ・ブランドのマザールは一体どこにあり，誰が埋葬されているのであろうか。

この問いの答えは，これら三兄弟の父ホージャ・イスハークと祖父マフドゥーミ・アーザムの埋葬地を次のように伝える『タズキラ・イ・ホージャガーン』にすでに用意されている。

> ホージャ・イスハーク・ワリー猊下を Isfidūk に埋葬した。マフドゥーミ・アーザム・パーディシャー猊下を Dahbit に埋葬していた。Dahbit と Isfidūk の間に河がある。南側は Isfidūk，北側は Dahbit である。さて，イーシャーン猊下ホージャ・イスハーク・ワリーを父のマザールに置かない理由は次の通りであった。マフドゥーミ・アーザム猊下は「誰をも我とわが息子ホージャ・イスハークの間に埋葬すれば，その者は天国の住民である」と言っていた。その理由から［ホージャ・イスハークは自らの遺体を］Isfidūk に置けと遺言していた。
>
> さらに Isfidūk からこの方の遺体を Bāgh-i buland に移す理由［について］。［ホージャ・イスハークが］七歳であったある日のこと。マフドゥーミ・アーザム・パーディシャー猊下とともに信奉者たちの一団が Kūhak 河へ行った。水が溢れる時であった。ハリーファのうち二人の者が河に入った。流れを渡れなかった。ホージャ・イスハーク・ワリー猊下は激昂のあまり水を鞭で叩いた。河は二つに分かれた。中に乾いた道が現れ，皆が渡った。しかしマフドゥーミ・アーザム・パーディシャー猊下は「おお息子よ，我々の前であなたは傲慢なことをした。最後に水はあなたに復讐せずにおかない」と言った。結局，Isfidūk のマザール（mazārāt）に水が近づいてきた。サマルカンド Thamarqand の君主たちにお告げ（bishārat）があって，その方の遺体を Bāgh-i buland に移した。すべての地所（？）（milk imlāq yerlāri）を光輝くマザール（mazār）へワクフ waqf と

した。今もなお彼らは自由に使える。[TKh, Institut de France, ms. 3357：18a-19a]

この引用史料の最後の部分については意味が取りにくいが，他の写本によると次のような文章になっている。

Bāgh-i buland は君主たちの庭園(chahār bāgh)であった。すべての地所や庭園草地(milk u amlāki wa bāgh rāghī)とともにマザールにワクフとした。今，彼らの子孫たちは自由に使える。[TKh, Turk d. 20：21b；cf. or. fol. 3292：36]

ここに現れる地名 Dahbit と Isfidūk について，『タズキラ・イ・ホージャガーン』の内容を翻訳し紹介した二人の先学がコメントしている。まず，この聖者伝の一部を要約したショー氏は，Dahbid はサマルカンドの近く，Isfudik は Khōkand [コーカンド] にあるとしている [Shaw 1897：34]。ショー氏に比べると，より逐語訳に近い訳文を提示したハルトマン氏は，Isfiduk と Dehbīd 両村落は Amū Darjā [アム河] に位置すると推定している [Hartmann 1905：206, note 2]。後述するように，これらの地名はサマルカンド付近にあったのであり，両氏の見解は，Dahbid がサマルカンドの近くにあることを除いて，受け入れることができない。

さらに両先学は，ホージャ・イスハークの埋葬地としても，またその長男クトブ・アッディーンの子孫が「祈禱者」であるマザールの所在地としても，バーギ・ブランドの名を挙げていない。すなわちショー氏の抄訳には，ホージャ・イスハークが移葬されたことも述べられておらず，また長男の子孫が「祈禱者」であるマザールの所在地も挙げられていない [Shaw 1897：34]。ハルトマン氏でさえ，この地名を「高い所にある庭園」「高い庭園」という普通名詞の意味に解している [Hartmann 1905：206]。

このように，『タズキラ・イ・ホージャガーン』の具体的な説明にもかかわらず，ホージャ・イスハークの埋葬地であるバーギ・ブランドの位置は未確定のままなのである。そこで，その位置を限定するためにも，迂遠ではあるけれども，まずマフドゥーミ・アーザムの埋葬地 Dahbit から考察しておきたい。なお，『タズキラ・イ・ホージャガーン』の他の写本によると，マフドゥーミ・アーザムの埋葬地は，Dah-bīd [Or. 5338：10b]，Dahbīd [Turk d. 20：21a] Dahbid [or. 9660：10b；Or. 9662：16b；or. fol. 3292：35] とも表記されている。

マフドゥーミ・アーザムの墓地と礼拝堂を調査したヴェセロフスキー氏によると，それらのある Кышлак Дагбид まではサマルカンドから12露里 [約12.8km] であった。サマルカンド城市の北辺西側のパイカバク門 [シャイフザーダ門] を出たヴェセロフスキー氏は癩病患者の滞留地である кышлак Махао，高い城塞があり Кундсуфи と呼ばれる都市廃墟を経てザラフシャン河の浅瀬を渡った。そこからダフビードへの道の両側には桑の木が植えられていた。Кышлак Дагбид は Ак-Дарья から引かれ Джуи-дивона に注ぐ灌漑渠 (арык) Шахоб の近くに位置し，ダフビード (дагбид，アラブ文字表記 Dahbīd) は「十のさるやなぎ (柳の木)」を意味するという [Veselovskii 1889：85-86]。なお，このダフビードの礼拝堂の写真と解説がプガチェーンコワ氏の『ソ連邦の芸術遺産：中央アジア便覧』[Pugachenkova 1983：126, 381] にある。

次に，ホージャ・イスハークの最初の埋葬地 Isfidūk は，Isfīdūk [Turk d. 20：21a-b；or. fol. 3292：35]，Isfūdūk [Or. 5338：10b] とも表記されているが，この Isfidūk という所と Dahbit との位置関係について『タズキラ・イ・ホージャガーン』の他の写本 [Turk d. 20：21a；or. fol. 3292：35] に異説が見られる。すなわち，河の北側が Isfīdūk，南側が Dahbīd / Dahbid であるというのである。ヴェセロフスキー氏の報告によれば，ダフビードはザラフシャン河——すなわち上に引用した『タズキラ・イ・ホージャガーン』にいう Kūhak 河 [Barthold 1977：82, note 2]——の北側に当たると考えられるから，この異説は退けられよう。

作成年は不明なものの1835年に著作され始めたと推測し得る [Abū Ṭāhir 1965：7-8 アフシャール氏の解題]，アブー・ターヒル・ホージャ Abū Ṭāhir Khwāja のサマルカンド地誌ともいうべき著書『サマリーヤ』*Samariyya* には，ホージャ・イスハークのマザールの項目があり，簡潔に説明されている。すなわち，

> マフドゥーミ・アーザム・ダフビーディー Dahbīdī の息子ホージャ・イスハーク・ワリー猊下の神の恩寵の印たる (fayḍ-āthār) マザール。城市 (shahr) の外，北方の Bāgh-i buland 村 (qarya) に当たり，アミール・ティムール・グールカーン [キュレゲン] Amīr Tīmūr Gūrkān の庭園 (chahār bāgh) の貯水池のそばにある。ホージャ [・イスハーク] 猊下はダフビード Dahbīd 村の Safīd (または Sīfīd) dūk 村において埋葬されていた。日の経つうちに Kūhak 河がホージャ猊下のマザールに近付いてきた時，偉人たちの精髄アブド・アッラー・ホージャ 'Abd Allāh Khwāja ——かのお方 (īshān) [ホージャ・イスハーク] の末弟 (？) (farzand-i bī-wāsiṭa)——は，その場所から祝福された遺骸を取り出して，かのお方の qīshlaq (「冬営所」) であった Bāgh-i buland 村に，サマルカンド城市の広庭 (finā) に，自分たちのそばに持っていった。[Abū Ṭāhir 1965：89-90；cf. Akimushukin 1976：303, note 229]

なお，ホージャ・イスハークの遺骸をバーギ・ブランドに運んだとされているアブド・アッラー・ホージャがホージャ・イスハークの異母弟であることが他の史料より確認される。すなわち，13男12女をもうけたマフドゥーミ・アーザムの四人の正妻 (ḥaram) のうち3番目の正妻 Būbīcha-i Kāshgharī (TKh, Institut de France, ms. 3357：8b では Bībīcha-i Kāshqarī) の長男がホージャ・イスハーク・ワリーであり，4番目の正妻 Būbīcha-i Bukhārī の四男すなわち末息子の名がホージャ・アブド・アッラーなのである [*Majmū'at al-muḥaqqiqīn*：32-33]。

最後に，バーギ・ブランドの位置について考察しておこう。『サマリーヤ』ではホージャ・イスハークの最初の埋葬地は Safīd (または Sīfīd) dūk 村となっていて，『タズキラ・イ・ホージャガーン』にいう Isfidūk / Isfīdūk / Isfūdūk と表記が少し異なるけれども，バーギ・ブランドがサマルカンド城市の北方にあると明記されていることが注目される。『バルトリド著作集』第9巻付録の「9-19世紀サマルカンドの平面図」には，サマルカンド市壁北面のパイカバク門 (シャイフザーダ門) の北北東約3 kmのところに Баг-и баланд と記入されている。これがホージャ・イスハークの埋葬地バーギ・ブランドに当たるという確証はないが，その

可能性を指摘しておきたい。

また，ヴェセロフスキー氏は，ホージャ・イスハークはサマルカンドの近く，арык Сиоб から遠からざかる所に埋葬されたとしている[Veselovskii 1889：91]。арык Сиоб が，Afrasiyab の北を流れる Ab-i Siyah Ariq [Golombek-Wilber 1988 ：Map 6 (15th Century Samarqand)]に当たるならば，ヴェセロフスキー氏の説明は「9-19世紀サマルカンドの平面図」の Баг-и баланд の位置と矛盾しない。なお，間野英二氏の研究によると，「高みの園」Bāgh-i buland はティムールがサマルカンドの東方に造った庭園である[間野 1983：253]けれども，方角が合わず，同一の地名とは考えがたい。

さて本筋に戻ると，ホージャ・イスハークの長男ホージャ・クトブ・アッディーンの子孫が「祈禱者」であったバーギ・ブランドのマザールはサマルカンド地域にあり，そこにホージャ・イスハークが埋葬されていて，イスハークの子孫が，ワクフ制度によってマザールに寄進された庭園や地所・庭園草地を自由に使用していたのである。これは長男の家系の者たちがホージャ・イスハークのマザールを拠点にしてサマルカンドにおいて活動していたことを示していよう。換言すれば，ホージャ・クトブ・アッディーンの東トルキスタンでの活動が史料に見られないのは，以上の事情から首肯されるのである。

他方，三男のホージャ・ムハンマド・ヤフヤー(ホージャ・シャーディー)のマザールは『タズキラ・イ・ホージャガーン』に述べられているようにヤールカンドにあった。これはイスハーク派がホージャ家の新天地をタリム盆地西辺に求め，そこに宗教的地盤を築いたことを示しているのであろう。そこは父ホージャ・イスハークが伝道活動をしたことのある土地ではあったけれども，父の活動の成果にはまだ限界があった。次章では父のあとを受け継いだ子ホージャ・シャーディーの活動を考察したい。

II ホージャ・ヤフヤー(ホージャ・シャーディー)の事績

1 略歴

ホージャ・シャーディー Khwāja Shādī あるいはアズィーズラル・ホージャム 'Azīzlār Khwājam の名でも知られている[TShM：70；AT：96a, 98a]ホージャ・ムハンマド・ヤフヤーの略歴を述べておこう。彼の生誕年は知られていないが，いわゆるカーシュガル・ハーン国の第4代君主ムハンマド・ハーン Muḥammad Khān (在位1591-92～1609-10年[Akimushkin 1984：160, 162])が死去した時，ホージャ・ヤフヤーは21歳であった[AT：98a]。アキムシュキン氏の研究によれば，ムハンマド・ハーンが死んだのは1018/1609-10年である[Akimuskkin 1976：290, note 164]から，ホージャ・ヤフヤーの生誕年は998/1589-90年と計算できるけれども，後述の死没年からの計算には合わない。

ムハンマド・ハーンは，マー・ワラー・アンナフルから来た七歳半のホージャ・ヤフヤーをヤールカンド郊外のキョク・リバート Kōk Ribāṭ まで出迎え，カラ・クム Qarā Qūm から

自らホージャの馬の手綱をとって町(shahr)[すなわちヤールカンド城市]にお連れしたという[AT：96a, 98a；cf. TShM：30；澤田 1987：71]。『シャー・マフムードの歴史』と同じ著者による聖者伝『アニース・アッターリビーン』には，その時ハーンがSang Qāshとファイザーバード Fayḍ-ābād を彼への捧げ物とした(niyāz kardand)ということと，「聖なる系譜」(silsila-i sharīf)をハリーファ・シュトゥル Khalīfa Shutur に委ねたということが付言されている[AT：96a]。Sang Qāshの位置は不明であるが，ファイザーバード(Faiz Abad)はカシュガルの東方約60㎞[Hedin 1966：NJ43-Xa]にあるオアシスである。系譜とハリーファ・シュトゥルについては後述する。

ホージャ・ヤフヤーの没年について『シャー・マフムードの歴史』は，彼の生涯は63年であり，1055年[1645-46年]に逝去したという情報を伝える[TShM：70]。しかし，『アニース・アッターリビーン』によると，かれはカーシュガルにおいて享年56歳で逝去し，その遺体はアブド・アッラー・ハーンによりヤールカンドのアルトゥン Altūn に埋葬されたという[AT：100b-101a](アルトゥンについては後述の第Ⅲ章で詳述する)。1055年の死没年を基準にすると，その生誕年は，63年の生涯ならば992/1584-85年，享年56歳ならば1000/1591-92年となるが，いずれも998/1589-90年という先に計算した生誕年と合わない。

要するに，彼の生涯は1584-85/1589-90/1591-92年頃から1645-46年までである。

2　道統の継承

7歳半の時にマー・ワラー・アンナフル，すなわち西トルキスタンからタリム盆地西部のヤールカンドに来たホージャ・ヤフヤーは，父ホージャ・イスハークの後継者の地位に就いていなかった。それはホージャ・ヤフヤーの宗教的系譜から判明する。すなわち，ナクシュバンディー教団の道統(教統)を経て預言者ムハンマドに遡る彼の宗教的系譜は『アニース・アッターリビーン』によると，次のように受け継がれてきたものである。

> イーシャーン猊下〈アッラーよ，彼の秘密を浄めたまえ〉の道統(nisbat-i ma'nawī)は隠されていない。ホージャム・パーディシャー猊下[すなわちホージャ・ヤフヤーの長子ホージャ・アブド・アッラー]はホージャ・セピー・ハリーファム Khwāja Sepī Khalīfam[3]から受け取っている。この方はホージャ・シャーディー・ホージャム猊下〈彼の秘密を浄めたまえ〉から受け取っている。この方はハリーファ・シュトゥル〈彼の上に慈悲あれかし〉から受け取っている。この方はムハンマド・ハーン陛下から受け取っている。この方は時のガウス[すなわちクトブの別の言い方[中村 1987：204；TShM：16]。クトブについては後述する]様(ḥaḍrat-i ghawth-i waqt)，ホージャ・イスハーク〈アッラーよ，彼を嘉したまえ〉から受け取っている。[以下省略][AT：7b]

すなわち，道統は

ホージャ・イスハーク➡ムハンマド・ハーン➡ハリーファ・シュトゥル➡ホージャ・ヤフヤー(ホージャ・シャーディー)➡ホージャ・セピー・ハリーファム➡ホージャ・アブ

ド・アッラー(ホージャム・パーディシャー)
と受け継がれていったのである。

このようにホージャ・ヤフヤーは父ホージャ・イスハークから直接に教派を受け継いだのではなく,また子のホージャ・アブド・アッラーに直接,道統を伝えたのでもなかった。そこに介在したムハンマド・ハーン,ハリーファ・シュトゥル,ホージャ・セピー・ハリーファムについて考察することは,ホージャ・ヤフヤーの活動を理解する上で極めて重要であろう。

ムハンマド・ハーンは前述したように幼少のホージャ・ヤフヤーをヤールカンド郊外で出迎えた,チャガタイ・ハーン系の君主である。この君主はホージャ・イスハークのハリーファ khālifa(「代理人」「後継者」)であり,逝去する直前まで6ヵ月間,クトブ quṭb[「宇宙の軸」すなわちの聖者の位階制の最高位[中村 1987:204]]であったと伝えられており,ハージー・ムラード Hājjī Murād なる者は,ムハンマド・ハーンの「光に満ちたマザール」(mazār-i pur-anwār)に参詣(ziyārat)している[TShM:28-29]。その人生は72年間である[TShM:31]が,『アニース・アッターリビーン』も,ムハンマド・ハーンはダルヴィーシュたること(darwīshī)と君主たること(pādishāhī)とを綜合し(jam' sākhtand),弟子(murīd)たちを教導(tarbiyat)したと,その生涯をまとめている[AT:96a]。ムハンマド・ハーンが偉大なるスーフィーとして活動していたことは明らかであろう。

アズィーザーン猊下[ホージャ・イスハーク]がサマルカンド Thamarqand から「指導の書」(haṭṭ-i irshād)を書いて,ムハンマド・ハーンを全てのハリーファたちの長に任命した時,猊下の許からカーシュガル,ヤールカンドに向かい,「指導の書」をムハンマド・ハーンに届けたのが,ハリーファ・シュトゥルである[AT:95b-96a, 97b]。この「指導の書」により大ハリーファ(khalīfa al-khulafā)になったムハンマド・ハーン[AT:96a]は,ハリーファ・シュトゥルを自分の地位に任命し,この世から去った[AT:97a]。

ハリーファ・シュトゥルは『アニース・アッターリビーン』によると,ウズベクの出身(az aḥfād-i Özbek)であり,父イブン・ヤミーン Ibn Yamīn の死後,Shaburghān の地主(mallāka-i Shaburghānī)である母のもとにいたけれども,母から離れてアズィーザーン猊下[すなわちホージャ・イスハーク]に仕えるようになった[AT:96a-b;cf. Akimushkin 1976:279, note 111]。なお,Shaburghān はアフガニスタン北部のバルフ西方約100kmに位置する Shibarghan / Shapurqān[Barthold 1977:79]/ Shaburḳān[Le Strange 1966:426]に当たろう。

『シャー・マフムードの歴史』には,ホージャ・イスハークの東トルキスタンにおける布教活動の際に,アクスゥとトゥルファーンにおいてシュトゥル・ハリーファが登場している[TShM:19;澤田 1987:69-70]から,師匠であるホージャ・イスハークと東トルキスタンとの係わりを考える上で彼は極めて重要な人物といえよう[1]。また,上述のように彼はホージャ・イスハークから「指導の書」をハンマド・ハーンに届けたが,その手荒な宗教行為については次のようなエピソードもある。

ハリーファ・シュトゥルは wilāyat[すなわちマー・ワラー・アンナフル]から大きな

驢馬に乗って来ていた。大きな杖を手に持っていた。ハリーファム[シュトゥルのこと]の習慣は次のとおりであった。[彼は]その乗用動物に跨り,その杖を手にし,前後に多数の集団が同行した。その杖で人を打ちすえると,どんな人も暫く気を失って倒れていて,我がホージャよ,と言いながら立ち上がり信奉者(mukhliṣ)となった。[AT : 97b]

ハリーファ・シュトゥルには三人の息子がいた。正妻(ḥaram)のビービー・アーファーク・ビービー Bībī Āfāq Bībī からの二子,すなわちホージャ・セピー・ハリーファの名で有名なホージャ・サイイド・ムハンマド・ハリーファ Khwāja Sayyid Muḥammad Khalīfa とヌール・ムハンマド・ホージャ Nūr Muḥammad Khwāja, そして妾(qummā)から生まれたシール・ムハンマド・ホージャ Shīr Muḥammad Khwāja である[AT : 97b]。彼の最初の子ホージャ・セピー・ハリーファが,上挙の系譜のホージャ・ヤフヤーから教統を受け継ぎ,ヤフヤーの子ホージャ・アブド・アッラーに伝えた人物である。

シュトゥル・ハリーファは84年生き,「聖なる系譜」(silsila-i sharīf)をホージャ・ヤフヤーに委ね,この無常の世界から永遠の世へ移った[AT : 97b-98a]。但し,彼の逝去については,『シャー・マフムードの歴史』[TShM : 56-57]にホージャ・ヤフヤーの呪詛のような行為が語られている。すなわち,所謂カーシュガル・ハーン国第6代ハーン,アブド・アルラティーフ 'Abd al-Laṭīf Khān の治世(1028/1618-19年頃～1040/1630-31年頃[Akimushkin 1984 : 160, 162])にアズィーザーン猊下[ホージャ・ヤフヤー]はサマルカンドへ行き,偉大な父[ホージャ・イスハーク]のマザールに参詣(ziyārat)する。

それからハリーファ・シュトゥルとミールザー・ムハンマド・ユースフ Mīrzā Muḥammad Yūsuf[アブド・アルラティーフ・ハーンのアタリク atalīq[「父傅」「師傅」の意][TShM : 52]]への不満を父[の霊魂]に告げた。ハリーファ達をマザールの外に残して,イスマーイール・スーフィー Ismā'īl Ṣūfī を伴って特別なタワーフ ṭawāf[墓の周囲をめぐること]につとめていた。アズィーザーン猊下[ホージャ・イスハーク]の墓(qabr)からお告げ(bishārat「喜ばしい知らせ」)があった。アズィーザーン猊下[ホージャ・ヤフヤー]とイスマーイール・スーフィーはお告げを知って,外に出た。カーシュガル出身のハリーファ,ハーフィズ・ナスィール Ḥāfiẓ Naṣīr がハリーファ達の中にいた。どんな霊感(kashf)がアズィーザーン猊下に現れようとも,ハーフィズ・ナスィール・ハリーファはそれに気づいていた。ハーフィズ・ナスィール・ハリーファは「アズィーザーン猊下はハリーファ・シュトゥルとミールザー・ムハンマド・ユースフを叩いた」とハリーファ達に述べた。[TShM : 57]

アズィーザーン猊下はサマルカンドからカーシュガルの方へ帰還する。Shārt 峠[オシュとカーシュガルの間にある峠[Akimushkin 1976 : 287, note 147]]を通過していた時,シュトゥル・ハリーファとミールザー・ムハンマド・ユースフの死の知らせが届いた[TShM : 57]という。残念ながら,この二人が何故ホージャ・ヤフヤーに不満をもたれたのかは,つまびらかではない。

以上要するに，ホージャ・ヤフヤーは父ホージャ・イスハークから直接道統を受け継いだのではなく，所謂カーシュガル・ハーン国第4代君主ムハンマド・ハーンとシュトゥル・ハリーファという父の二人の弟子を通じて道統を継承し，最高指導者となった。そしてこの道統はシュトゥル・ハリーファの子ホージャ・セピー・ハリーファを通じてホージャ・ヤフヤーの子ホージャ・アブト・アッラーに伝えられたのである。

3 政治活動——ハーン家との関係を中心に——

ホージャ・ヤフヤーが7歳半でヤールカンドに来て，56歳もしくは63歳で亡くなり，その地のアルトゥンという所に葬られるまで，タリム盆地西辺においてどのような宗教活動をしたのか，残念ながらその詳しい事績は分からない。ここでは，比較的記事の多いカーシュガル・ハーン家との関係を軸にして彼の政治的側面を明らかにしたい。

ホージャ・ヤフヤーの生涯の時期に，ヤールカンドを首都にしてタリム盆地西半部のホタン，カーシュガル，アクスゥ等のオアシス地域を統治していた所謂カーシュガル・ハーンは，上挙の第4代ハーン，ムハンマドから第10代ハーンのアブド・アッラー 'Abd Allāh Khān（在位1048/1638-39年～1078/1667-68年［Akimushkin 1984 : 160, 162］）までである。ムハンマド・ハーン自身はホージャ・ヤフヤーの父に師事し後継者にまでなったスーフィーであったけれども，アブド・アッラー・ハーンが猊下［ホージャ・ヤフヤー］に帰依（inābat）していた［TKh, Institut de France, ms. 3357 : 21a］と伝えられている以外に，これらのハーンたちにおけるホージャ・ヤフヤーとの積極的な宗教的結びつきはよく分からない。しかし，ハーン家の統治体制にとってホージャ家の宗教権威は魅力的なものであったろうし，ホージャたちにとってもハーン家の世俗的な権力は教線の拡大に大きな力となったであろう。

ホージャ・ヤフヤーがハーン家の政治体制に関わっていたことが，ハーンの即位記事から窺われる。ムハンマド・ハーンの子シュジャー・アッディーン・アフマド Shujā' al-Dīn Aḥmad Khān が第5代ハーン（在位1018/1609-10年～1028/1618-19年頃［Akimushkin 1984 : 160, 162］）となった状況を『シャー・マフムードの歴史』はムハンマド・ハーン逝去の記述に続き，次のように記す。

> シュジャー・アッディーン・アフマド・ハーンはカーシュガルにいた。アズィーザーン猊下［ホージャ・ヤフヤー］とホージャ・ラティーフ Khwāja Laṭīf とミールザー・ギヤース Mīrzā Ghiyāth とミールザー・アブド・アッラー Mīrzā 'Abd Allāh はシュジャー・アッディーン・アフマド・ハーンに人を遣った。［シュジャー・アッディーン・アフマドはヤールカンドに］来て，君主の座を固めた。その時には，ミールザー・シャー Mīrzā Shāh は逝去していて，ヤールカンドのハーキム職（ḥukūmat）はその息子シャーヒ・ファルビ Shāh-i Farbih に授けられていた。［中略］［シュジャー・アッディーン・アフマド・ハーンは］シャーヒ・ファルビを以前通りハーキムにした。ホージャ・ラティーフをムハンマド・ハーン［の時］と同様にワズィール wazīr にした。ミール

ザー・ギヤース・サグリチ Sāghrīchī が9ヵ月後に死去した。彼の代わりに彼の甥ミールザー・アブー・グール Mīrzā Abū Ghūr をコシュ・ベギ qosh begi とウチュ・ベギ uch begi にして，国事に関与させた。ミールザー・アブド・アッラーが死んでいた。彼の婿でミールザー・シャーの子アブー・アルマーニー・シャー Abū al-Ma'nī Shāh をイシク・アガにした。[後略] [TShM：31-32]

要するに，ハンマド・ハーンの死去に際してホージャ・ヤフヤーと三人の人物が，カーシュガルとヤンギ・ヒサール Yāngī Ḥiṣār の支配権(imārat)を委ねられていた[TShM：30]シュジャー・アッディーン・アフマドに人を派遣した結果，シュジャーがカーシュガルからヤールカンド来てハーン位に就いたという事なのである。なお，『シャー・マフムードの歴史』においては，ハーン位に就いた人物は，それ以前の事績の記述においてもハーンという称号で呼ばれたり，その称号が付けられたりしている。

ホージャ・ヤフヤーとともにシュジャー・アッディーン・アフマドの即位に関与したその三人の人物は，それ以前からハーン国の政治体制の中枢にいた。すなわち，前代のムハンマド・ハーンの即位の時に，ホージャ・ラティーフは印璽官(muhr-dār)とされて全権ワズィール(wazīr-i muṭlaq al-'inān)となり，ミールザー・ギヤースはコシュ・ベギとウチュ・ベギに任命されて大アミール(amīr al-umarā)となり，ミールザー・アブド・アッラーはイッシク・アガ職(ishik agha-garī)を贈与されており，ヤールカンドのハーキム職(ḥukūmat)を授けられたミールザー・シャー(シュジャーの即位時には死去していた)を加えて，この四人のアミールに国事(umūr-i mamlakat)が委ねられたという[TShM：24；cf.30]。上述の即位記事において筆頭に挙げられているホージャ・ヤフヤーには，このような国家要職にある四人のアミール達と並ぶほどの，あるいはそれ以上の政治的役割があったのではないだろうか。

ハーンの即位にホージャ・ヤフヤーが関わった事については，第6代ハーン，アブド・アルラティーフ(シュジャー・アッディーン・アフマド・ハーンの子)が14歳で即位した(TShM：53]時についても，次のような記事がある。

アズィーザーン猊下[ホージャ・ヤフヤー]〈彼の上に恩寵と祝福あれかし〉と顕人たち(akābirān)とアミール達は古くからの習わしに従ってアブド・アルラティーフ・ハーンをハーン位に確立させた。フトゥバと貨幣は彼[ハーン]の名で装飾された。[TShM：52]

さらに，第10代ハーン，アブド・アッラー 'Abd Allāh Khān (在位1048/1638-39年～1078/1667-68年)が即位した時にも，ホージャ・ヤフヤーが登場している。すなわち，

ハーン[すなわちアブド・アッラー]は Yāngī Arīq から勝利に満ちて，天国に似たヤールカンドに来た。アズィーザーン猊下[ホージャ・ヤフヤー]とアーフンド・ホージャ・ナスィール Ākhwund Khwāja Naṣīr とアーフンド・ムッラー・サーリフ Ākhwund Mullā Ṣāliḥ や国の貴人たち(a'yān-i mamlakat)がハーンを迎えに出た。Qāymāqchī で出会った。ハーンを古くからの習わしに従ってハーン位に即けた。[TShM：64]

このように，ホージャ・ヤフヤーが国の枢要な人物たちと共に新しいハーンの即位の場面に登場しているのは，その即位事情への積極的な関与を示しているのではないだろうか。ただ単に新ハーンの即位儀式に参加する，あるいは宗派の側からの承認を示すという程度ではなく，もっと込み入った役割を果たしていたのではないだろうか。

第7代のアフマド・ハーンから第10代のアブド・アッラー・ハーンの即位にいたる政治史は，ハーン家内の抗争に満ちている。その内訌におけるホージャ・ヤフヤーの事績をたどることにより，彼の政治参加の実状を窺ってみよう。

この第10代ハーン，アブド・アッラーは第4代ハーン，ムハンマドの子孫ではなかった。第5代から第9代までのハーン位に就いたのは，ムハンマドの子，孫，曾孫たちであった。アブド・アッラーはムハンマド・ハーンの末弟であるアブド・アッラヒーム・ハーン 'Abd al-Raḥīm Khān の息子である。アブド・アッラヒーム・ハーンはすでにムハンマド・ハーンの時にチャリシュ Jālīsh［カラシャフル］とトゥルファーン Ṭurfān において王位を確立させていた［TShM：29, 54］。さらにアブド・アッラヒームは西方のクーサン Kūsan［キュセン，クチャ］，アクスゥ Aqsū，ウチュ Uch［ウシュ・トゥルファーン］にまで攻撃をかけて［TShM：54-55］，ヤールカンドのハーン家の勢力圏への進出を図っていた。またアブド・アッラヒームのもとにはカザーク族のシガイ・ハーンの息子イシム・ハーン Ishim Khān ibn-i Shighāy Khān-i Qadhāq がターシュケント Tāshkand から来ていた［TShM：55］。

そのような軍事活動の一環としてアブド・アッラヒームがアクスゥ方面に進撃してきて，アクスゥを三ケ月包囲した際に，時のヤールカンドの第6代ハーン，アブド・アルラティーフ（在位1028/1618-19年頃～1040/1630-31年頃）は次のように対応した。

> アブド・アルラティーフ・ハーンは国の柱たる者たちや国の貴人たちに相談した。ハーンとアズィーザーン猊下［ホージャ・ヤフヤー］がアクスゥ方面へ向かうことに方策は定まった。ハーンは多数の軍勢を集め，アクスゥの方へ軍を率い，宿駅を重ねて，ヤンギ・アリク Yāngī Arīq に到り，下馬した。［TShM：56］

結局，アブド・アルラティーフの進軍を知ったアブド・アッラヒームとイシム・ハーンは都（pāy-takht「王座の膝元」）たるチャリシュとトゥルファーンへ帰還した［TShM：56］。ホージャ・ヤフヤーがこのアクスゥへの救援軍に参加していることに注目せねばならない。

ホージャ・ヤフヤーがハーンの軍事活動に同行している例は他にも見られる。後代のことであるが，第10代のアブド・アッラー・ハーンがアクサイ Aqsāy［西部天山山脈の支脈間を西から東にウシュ・トゥルファンをへてアクスゥへ流れる河の上流部であろう］においてキルギズ族と戦ったときの情景が次のように記述されている。

> キルギズ Qīrqīz はハーン［アブド・アッラー・ハーン］に迫っていた。［ハーンの弟］イブラーヒーム・スルターン Ibrāhīm Sulṭān が［ハーンを］キルギズの手から救った。アズィーザーン猊下［ホージャ・ヤフヤー］〈彼の上に慈悲と祝福あれかし〉はその軍においてハーンに同行していた。貴賤大小の人々がアズィーザーン猊下から多くの奇蹟

(karāmāt)を目撃した。その一つは次の通り。キルギズが勝った時,[アズィーザーン猊下は]馬から下りて,心を平静にしていた。その後,名だたる勇者たちがキルギズに勝利した。[TShM：69]

この記事はハーンの弟イブラヒームの剛勇をしめすためのエピソードであるけれども,アブド・アッラー・ハーンに同行するホージャ・ヤフヤーは奇蹟を顕す聖者の姿で登場しているのである。

さて本筋に戻ると,アブド・アッラヒーム・ハーンはムハンマド・ハーンの時代にチャリシュとトゥルファーンに支配権を定められ,40年間,独立して統治し,70歳を越えていた時に逝去した[TShM：61]。9人の息子を残したが,その第一子が,のちにヤールカンドにおいて第10代ハーンとなるアブド・アッラーである[TShM：61]。

一方,ヤールカンドのハーン位は第6代アブド・アルラティーフ・ハーンの死後,その甥であるスルターン・アフマド Sulṭān Aḥmad(別名フラド・ハーン Fūlād Khān)とスルターン・マフムード Sulṭān Maḥmūd(別名キリチュ・ハーン Qīlīch Khān)兄弟[TShM：38-39]によって受け継がれていった。

アブド・アルラティーフが逝去した時,スルターン・アフマドがアクスゥからヤールカンドに来てハーン位を継いだが,配下のアミール達が対立抗争している時,弟のスルターン・マフムードはヤールカンドのホージャ・ラティーフの娘をめぐる確執をきっかけに兄のスルターン・アフマド・ハーンと戦端を開くことになった[TShM：58-60]。

すなわち,弟マフムードは軍を整えてヤールカンドに来て,キョク・クム Kök Qūm に下馬し,20日近く包囲して帰還したが,1年後に再びヤールカンド方面に行動を起こした[TShM：60]。ヤールカンドのアフマド・ハーン側では,迎撃すべしという者どもと,町(shahr)に立てこもろうと説く人達がいたが,結局,迎え撃つことになり,アフマドの軍勢は町から Dūng Bāgh に来て,戦列を整え,弟マフムードの軍も戦列を整え,戦闘に入った[TShM：60]。結局,戦列離脱者の出たアフマド・ハーンは敗れ,アクスゥへ向かい,勝利を得た弟のマフムードが王位を確立した[TShM：60]。すなわち,第7代ハーン,スルターン・アフマドは弟に追われてアクスゥへ逃げ,弟スルターン・マフムードがヤールカンドにおいて第8代ハーン(在位1042/1632-33年～1045/1635-36年[Akimushkin 1984：160,162])となったのである。

さて,東方のチャリシュとトゥルファーンにおいては,アブド・アッラヒーム・ハーンが逝去し,その長子のアブド・アッラーがクーサンからチャリシュに来ていたが,その隙にスルターン・アフマドはアクスゥからクーサンに来て襲撃をかけた[TShM：61]。スルターン・アフマドがクーサンからアクスゥに帰還したとき,アブド・アッラーはスルターン・アフマドに対して軍を率い,アフマドはアクスゥから逃げてヤールカンドに来た[TShM：61]。この時にヤールカンドにおいてハーン位にあったスルターン・マフムード・ハーンは兄のアフマドに厳しい処置をしようとしたが,それを思いとどまらせたのは,アズィーザーン猊下,すなわちホージャ・ヤフヤーとハーニム・パーディシャー Khānīm Pādishāh (アフマド,マフ

ムード兄弟の叔父アブド・アルラティーフ・ハーンの母[TShM：53]であった。すなわち,『シャー・マフムードの歴史』は次のように伝えている。

スルターン・マフムード・ハーンは兄弟のスルターン・アフマド・ハーンに追放の命令を示した。アズィーザーン猊下[ホージャ・ヤフヤー]とハーニム・パーディシャーは「スルターン・アフマド・ハーンはアブド・アッラー・ハーンから逃げて,あなたの許に避難している。彼を追放することは全く侠気に欠ける」と懇請した。スルターン・マフムード・ハーンは拒げられ,[命令を]撤回し,兄弟[スルターン・アフマド・ハーン]に礼を尽くし,シマール・バーグ Shimāl Bāgh[「北の園」の意]を与え,三ヵ月後にアクスゥの方に行軍すると布告した。しかしアブド・アッラー・ハーンの幸運の方がまさった。[TShM：62]

このように,ホージャ・ヤフヤーらの執り成しによって兄のアフマドを許したマフムードは,アクスゥにおいて王位を固めたアブド・アッラーに対する軍を整えるのにかかりきりになったが[TShM：62],1045/1635-36年にヤールカンドで逝去した。すなわち,『シャー・マフムードの歴史』は過度の飲酒による謎めいた彼の死を伝えて,次のように結んでいる。

スルターン・マフムード・ハーンの恐ろしい出来事は都(「王権の家」dār al-salṭanat)ヤールカンドにおいて1045年のある月においてであった。22年生き,約3年統治した。[TShM：62]

このマフムード・ハーンの死から兄アフマドのハーン位への再登極にいたる経緯について,『アニース・アッターリビーン』はホージャ・ヤフヤーの関与をほのめかしているので,長文ではあるが,その記事を以下に翻訳してみよう。

キリチュ・ハーン[スルターン・マフムード・ハーンの別名]のいくらかの態度は高貴なる聖法(shar')に適合していなかった。イーシャーン猊下 Ḥaḍrat-i Īshān[ホージャ・ヤフヤーを指す]はフーンギー・ハリーファ Fūnggī Khalīfa の異名を持つハーフィズ・ナスィール・ハリーファ Ḥāfiẓ Naṣīr Khalīfa と,ハリーファ・ベグ Khalīfa Beg の名で知られるミールザー・マズィード・ベグ Mīrzā Mazīd Beg に命じた。「宗教の顕人たち(akābir-i dīn)はキリチュ・ハーンを世から退け,フラド・ハーン[スルターン・アフマド・ハーンの別名]を彼の地位に任命した。あなた達は行ってフラド・ハーンを王座につけよ。」フーンギー・スーフィー Ṣūfī とハリーファ・ベグはフラド・ハーンのもとに行った。フラド・ハーンはシマール・バーグに居を定めていた。キリチュ・ハーンはアバー・バクル・ミールザー Abā Bakr Mīrzā の内城(ark)に住んでいた。フーンギー・ハリーファとハリーファ・ベグはフラド・ハーンを毛氈に投げ入れ,ハーンに推戴した(ba-zilchä andākhta khān bar-dāshtand)。この仕事を終えて,1時間たっていなかった。キリチュ・ハーンが兄のフラド・ハーンに会いに来た。兄弟二人とも一つの絨毯(bisāṭ)に坐った。何事についても会話をして,立ち上がり別れを告げた。

キリチュ・ハーンには少し酒('arāq [<'araq])の楽しみがあり,オルドゥ(ordu,宮殿)

に来た。フラド・ハーンの人々は非常に恐れた。フーンギー・ハリーファとハリーファ・ベグとして名声を得たミールザー・マズィード・ベグは聖者を気取って(khwudhārā walī girifta),「キリチュ・ハーンをアズィーザーン 'Azīzān[すなわち,ホージャ・ヤフヤー]が叩いた」と言ってフラド・ハーンを王座に坐らせた。キリチュ・ハーンは来て今夜の出来事を聞いていたので,「明日,我々をキリチュ・ハーンは殺す。」フーンギー・ハリーファとハリーファ・ベグは「我々は利己心でその事をしたのではない。イーシャーン猊下の命令で立ち上がったのだ。恐れるな,勇敢であれ」と言った。

まさにその夜,キリチュ・ハーンはオルドゥに来て,黄色い血をだして,この世から去った。朝,アミール達や顕人たち(akābir)がイーシャーン猊下のもとに来て,スルターン・マフムード・ハーンの死去を通知した。かの猊下[ホージャ・ヤフヤー]はアミール達,ワズィール達,顕人たち,微賤な者どもと共にシマール・バーグに行き,スルターン・アフマド・ハーンをオルドゥに連れてきて,ハーンに推戴した。この奇蹟(karāmat)はイーシャーン猊下すなわちホージャム猊下 Ḥaḍrat-i Khwājam から顕れた。[AT:99b-100a)

ここに見られるホージャ・ヤフヤーの行為は,宗教的な装いをまとっているけれども,ハーン位継承への介入以外の何物でもない。若年のハーンはホージャ・ヤフヤーの魔の手を逃れることができなかったようにさえ思われる。

このように弟マフムードの逝去後に,兄のアフマドは再びヤールカンドの第9代のハーン位に就いた(在位1045/1635-36～1048/1638-39年[Akimushkin 1984:160, 162])。しかしホージャ・ヤフヤーは,次には,このアフマド・ハーンをも見捨てるのである。

スルターン・マフムード・ハーンがこの世から旅立った時,国の貴顕たち(a'yān u ashrāf-i mamlakat)は一致してスルターン・アフマド・ハーンを古くからの習わしに従ってハーン位に就けた。スルターン・マフムード・ハーンのアミール達は以前通りに任命された。スルターン・アフマド・ハーンは軟弱で思慮の乏しい人物であった。軍人(sipāh)や民(ra'īyat)は彼を嫌うようになった。アブド・アッラー・ハーンはカーシュガルの方へ向かった。スルターン・アフマド・ハーンは戦争のためカーシュガルの方へ向かった。Tūrghāy の地で合戦した。スルターン・アフマド・ハーンが勝った。アズィーザーン猊下[ホージャ・ヤフヤー]はアブド・アッラー・ハーンの側に傾いた。アズィーザーン猊下の援助によりアブド・アッラー・ハーンは無事にアクスゥへ戻った。[TShM:62]

アズィーザーン猊下ホージャ・ヤフヤーが,カーシュガル付近での合戦に勝利したスルターン・アフマドを見限って,戦いに敗れたアブド・アッラーの側に付いたと言うのである。このような寝返りはホタン Khotan の二人のベグ beg にも見られ,カーシュガルやヤールカンドからも名だたる勇士たち(bahādurān-i nāmī)が逃げてアブド・アッラーに合流した[TShM:62-63]。

勢力の増したアブド・アッラーはアミール達や顕人たち(akābir)の提案に同意して,弟のアブー・アルムハンマド・ハーン Abū al-Muḥammad Khān をトゥルファーンからアクスゥに呼び寄せ,一緒にカーシュガルへ軍を率いた[TShM：63]。そしてカーシュガル城市への攻撃を始めるのである。すなわち,

> ハーンたち[アブド・アッラー,アブー・アルムハンマド兄弟]が来て,カーシュガルの城塞(qal'a)の包囲につとめた。戦士たちは城門(darwāza)に攻撃をかけた。そして町(shahr)の外をとって,都(「王権の在所」maqarr-i salṭanat)[ここではアクスゥを指していると思われる]に戻った。スルターン・アフマド・ハーンは大部分のアミール達がアブド・アッラー・ハーンの側についたことを知ったとき,国を放棄し,バルフ Balkh の方へ向かった。[TShM：63]

バダフシャーン Badakhshān を経てマー・ワラー・アンナフル Mā warā' al-nahr に入ったスルターン・アフマド・ハーンは,ジャーン朝のイマーム・クリー・ハーン Imām Qulī Khān に歓迎され,ウズベクの軍をつけられてカーシュガルに向かうが,途中イマーム・クリー・ハーンに従わないアンディジャーンの人々との戦闘において死に,26年の生涯を閉じた[TShM：63]。

このようにスルターン・アフマド・ハーンが国外に逃亡した結果,アブド・アッラーは,先述したようにヤールカンドに来てホージャ・ヤフヤーらに迎えられ,第10代のハーンとなったのである。

以上縷々述べてきたように,第6代のアブド・アルラティーフ・ハーンの時代から第10代のアブド・アッラーの即位にいたるまでのハーン家内の抗争にホージャ・ヤフヤーは積極的に介入し,最終的に勝者の側についていたのである。

Ⅲ ヤールカンドのアルトゥン

第Ⅰ章で触れたように,ホージャ・ヤフヤー(ホージャ・シャーディー)のマザール(墓所,墓廟)はハーン国の首都ヤールカンドにあった。そして第Ⅱ章第1節のホージャ・ヤフヤーの略歴で触れたように,彼の遺体はアブド・アッラー・ハーンによってヤールカンドのアルトゥンに埋葬された。本章では,その埋葬地アルトゥンが如何なる所であるのかを検討することにより,アフドゥームザーダ・イスハーク派とヤールカンド,ひいてはヤールカンドのハーン家との宗教的結び付きを鮮明にしたいと思う。

『タズキラ・イ・ホージャガーン』はホージャ・シャーディー・アズィーズ 'Azīz[ホージャ・ヤフヤー]の逝去を述べたあと,

> アブド・アッラー・ハーン[Turk d.20：22b；Ms. or. fol. 3292：38ではイスマーイール・ハーンとするが年代的に無理]を先頭として国のすべての人々が哀悼して,アルトゥン Altūn 内に埋葬した。[TKh, Institut de France, ms. 3357：21a]

と簡潔に記している。

ホージャ・ヤフヤーが埋葬されたアルトゥンについてより詳しい情報が見られる『アニース・アッターリビーン』の記事を以下に翻訳しよう。

> イーシャーン猊下すなわちホージャ・シャーディー・ホージャム猊下〈彼の秘密を浄めたまえ〉は56歳であった。無常の世から永遠の館に移った。高貴なる系譜(nisbat-i sharīf)をホージャ・セピー・ハリーファ Khwāja Sepī Khalīfa として有名なホージャ・サイイド・ハリーファム Khwāja Sayyid Khalīfam に命じた。イーシャーン猊下はカーシュガルにおいて神の保護に結びついた。かのお方の棺をホージャ・ハリーファ〈彼の上に慈悲あれかし〉が運んで来た。アブド・アッラー・ハーン〈アッラーよ,彼の証を輝かしめたまえ〉は,アミール達やワズィール達や顕人たち(akābir)や微賤な者どもと共に出迎えた。ホージャ・セピー・ハリーファ〈彼の秘密を浄めたまえ〉はかの偉大な方の棺を乗せた駱駝の端綱をつかみ徒歩となり,頭を露わにして服を裂いた。イーシャーン猊下のすべての教友や友たち(aṣḥāb wa aḥbāb)はハリーファムに忠誠を誓い,ハーンは徒歩となり,ハリーファムに会った。[ハーンは]ハリーファムの許可で馬に乗って帰り,アルトゥン Altūn において墓のはたに(bar sar-i qabr)坐っていた。ハリーファムやすべての顕人たち,高貴な者たち(ashrāf)が故人の棺をアルトゥンに運んで来た。アブド・アッラー・ハーン〈アッラーよ,彼の殉教の地を香らせたまえ〉は先祖たちのはたに(bar sar-i ābā wa ajdād)埋葬した。ホージャ・セピー・ハリーファ〈彼の墓を照らしたまえ〉はそのマザール mazār の傍らに広大な修道場(khānqāh)を建てた。40[人]が[そこに]坐した。その時,すべての教友たち(aṣḥāb)の長で大ハリーファ(khalīfa al-khulafā)のホージャ・セピー・ハリーファは恐らく,かのお方の後継者(jā-nishīn)であった。[AT:100b-101a]

すなわち,カーシュガルで逝去したホージャ・ヤフヤー(ホージャ・シャーディー)の遺骸は,シュトゥル・ハリーファの息子で,ホージャ・ヤフヤーの後継者であったホージャ・セピー・ハリーファによってヤールカンドに運んでこられた。ヤールカンドの第10代君主アブド・アッラー・ハーンはその遺骸をアルトゥンの「先祖たちのはた」に埋葬した。そしてその墓所,すなわちマザールの傍らには,40人収容のスーフィズムの修道場が建てられたというのである。

ここで注目すべきことは「先祖たちのはた」にホージャ・ヤフヤーが埋葬されたということである。アブド・アッラーの先祖とは誰のことであろうか。そこで『シャー・マフムードの歴史』などからアルトゥンに埋葬されたと記されているハーン家の成員を捨い上げてみよう。

まず,第2代君主アブド・アッラシード・ハーン 'Abd al-Rashīd Khān の息子アブド・アルラティーフ・スルターン 'Abd al-Laṭīf Sulṭān が挙げられる。すなわち,

> アブド・アルラティーフ・スルターンの死去の知らせがハーン[アブド・アッラシード・ハーン]に届いた。ハーンとハーニム(皇后)は悼んでスルターンの遺体を運んでき

て，彼の偉大な祖父スルターン・サーイード・ハーン Sulṭān Sa'īd Khān の足もとに(dar pāy)，アルトゥン Āltūn に埋葬した。[TShM：11]

と記されているように，アブド・アルラティーフが所謂カーシュガル・ハーン国の創始者サーイード・ハーンとともにアルトゥンに埋葬されていたことが分かる。

さらに，第5代君主シャー・シュジャー・アッディーン・アフマド・ハーンもアルトゥンの「偉大なる父の足もとに埋葬」されたと伝えられている[TShM：47]。なお所謂『カーシュガル史』は，彼の父である第4代君主ムハンマド・ハーンが1018/1609-10年に死去し，父祖伝来の墓地アルトゥンに埋葬されたことや，ムハンマド・ハーンの弟クライシュ・スルターンの子フダーバンダ・スルターンがアルトゥンに埋葬されたことを伝えている[Akimushkin 1976：289, 290, notes 159, 164；Mulla Mer Salih Kashqāri-Haji Nur Haji 1986：123, 124]。

他にも，チャリシュとトゥルファーンのアブド・アッラヒーム・ハーンの子アブー・アルムハンマド・ハーンの遺骨(ustukhwān)がアルトゥンに埋葬されたし[TShM：76-77]，女性の場合については，ハーニム・パーディシャー[アブド・アッラヒーム・ハーンの娘[Akimushkin 1976：300, note 223]]から生まれた，イシム・ハーン[カザーク族のシガイ・ハーンの子]の娘アイ・ハーニム Ay Khānīm の遺体が「アルトゥンにおいて古えの君主たちと信仰戦士たるスルターン達の足もとに」埋葬されたことが知られる[TShM：73]。

以上挙げてきたように，アルトゥンは初代のサーイード・ハーン以来，歴代のハーンとその一族が埋葬されていた墓地であると考えて大過なかろう。

では，ホージャ・ヤフヤーだけがこのハーン家の墓地のあるアルトゥンに埋葬されたのであろうか。『タズキラ・イ・ホージャガーン』によれば，ホージャ・ヤフヤーの孫にあたるホージャ・シュアイブ Shu'ayb とホージャ・ダーニヤール Dāniyāl 兄弟，曾孫にあたるホージャ・ハームーシュ Khāmūsh とホージャ・アブド・アッラー 'Abd Allāh 兄弟がアルトゥンに埋葬されたことが知られる[TKh, Institut de France, ms. 3357：30a-b, 46a, 80a, 81a]。なお，ホージャ・ハームーシュの遺言によりホージャ・ジャハーン Jahān はアルトゥンにアク・マドラサ Aq Madrasa を建てた[TKh, Institut de France, ms. 3357：80a]。第Ⅰ章で見たように，ホージャ・ヤフヤーの父ホージャ・イスハークと祖父マフドゥーミ・アーザムはサマルカンド近郊に埋葬されているのであるから，アルトゥンとマフドゥームザーダとの結びつきはホージャ・ヤフヤーより始まり，その子孫に受け継がれていったのである。

念のため後代の史料を見ておこう。20世紀初頭に作成された『ターリーヒ・アムニーヤ』Tārīkh-i amniyya はヤールカンドのアルトゥン・マザールについて次のように整理している。

アルトゥン・マザール Altūn Mazār というところ。スルターン・サーイード・ハーンの時からイスマーイール・ハーン Ismā'īl Khān やムハンマド・エミーン・ハーン Muḥammad Emīn Khān 達の時に至るまで200年間あるいはそれ以上，古えのスルターンやハーン達がこの「七城の地」(Yetä Shahr)を統治して，ヤールカンドを都としていたようだ(pāy-takht qīlghan ekänlär)。ハーン達の死体がある所を，さらにハーンの死体を，

モグール Moghūl 達は尊び敬ってアルトゥンと呼ぶようだ(Altūn dep atar ekänlär)。そのように,ハーン達が目を通した,あるいは手を触れたニシャーン nishān[勅書の意だろう]をも尊んで altun dastak, altun nishān と言っている。この理由でアルトゥン・マザールとして有名になったのであろう。もしそのようでないのであれば,いかにしてアルトゥンをマザールと言うようになるのであろうか。そしてまたマフドゥーミ・アーザムの子孫たちのうち,ホージャ・シャーディー・ホージャムやホージャ・ダーニヤール・ホージャムを初めとして幾人かのホージャ・イスハーク・ワリー・アッラーの子孫たちやマフドゥーミ・アーザムの児孫たち(aḥfādlar),サイイドたちの祝福のマザール(mazār-i tabarrukāt)がある。[Mullā Mūsā, Collection Pelliot《B》1740 : 197b-198a ; cf. Mullā Mūsā-Pantusov 1905 : 307 ; Mulla Musa Sayrami-Änwär Baytur 1986 : 641-642]

ここでは,アルトゥン・マザールとは別にホージャ家のマザールがあるようにも受け取れるけれども,アルトゥンという墓地のなかにハーン家のマザールとホージャ家のマザールがあるということであろう。いずれにしても,アルトゥン・マザールがハーン家の墓地であったことが,不確定ながらも,主として述べられているのである[5)]。

最後に現代のアルトゥンについての資料を見ておこう。「喀什地区文物普査資料匯編」によれば,「莎車県莎車鎮第三居委会境内」で同鎮東部の十字路の処にある阿勒同麻扎[アルトゥン・マザール]の墓地の面積は1000平方メートル近くあり,同所にある阿勒同米契提清真寺[アルトゥン・メスチト]はその「題跡」によると1533年にヤールカンド・ハーン国の阿不里希汗[アブド・アッラシード・ハーン]により初めて建てられたといい,面積は1000平方メートル程である[自治区文物普査弁公室—喀什地区文物普査隊 1993 : 59, 85-86]。

この調査記録よりも詳しくアルトゥンの墓地・墓・大門・モスク・装飾文様などの写真・図版を載せ現代ウイグル語と漢語を併用して解説している『イスラーム建築芸術』はアルトゥン全体の構成を我々に分かりやすく伝えている[Häsän Abdurehim 1990 : 5, 102-108]。その解説文によれば,ヤールカンド・ハーン国のハーン達の墓地アルトゥンルク Altunluq はヤールカンドの旧市街と新市街の間にあるアルトゥン門(Altun Därwaza)の北側にあり,三つの部分から成る。すなわち,西側にアルトゥン・メスチト Mäschit(モスク),東側にアルトゥン・キョル Köl(池),その中間にアルトゥン・マザールがある。総面積は5000平方メートル以上である[Häsän Abdurehim 1989 : 102, 104]。さらに解説文はこの墓地に埋葬された人物としてヤールカンドのハーン家の成員8人の名や有名な詩人アマンニサ・ハーン Amannisa Khan,ホージャ・イスハーク・ワリーの名を挙げるけれども,その根拠は示されていない。特に最後のホージャ・イスハークは本稿第Ⅰ章で考察したようにサマルカンドのバーギ・ブランドに埋葬されたのであるから,アルトゥンに埋葬されているとは考えがたい。その子ホージャ・ヤフヤーがわざわざサマルカンドの父のマザールに参詣したことは既に第Ⅱ章第2節の末尾で述べたとおりである。

『中国伊斯蘭百科全書』の「阿爾騰麻扎」[アルトゥン・マザール]の項目をみると,付属の清

真寺のなかに高さ1.5メートル，幅0.7メートルの石碑が一つあり，アルトゥン・マザールと清真寺の歴史および関連する情況が刻まれていたが，1935年にソ連の考察隊により持ち去られたという[中国伊斯蘭百科全書編輯委員会 1994：11][6]。

1990年8月にヤールカンドを訪ねた日本人調査隊の一員，私市正年氏の報告によると，アルトゥン・マザールには，かなりの者が参拝にきているといい，マザールがVTRに収録されている[清水 1991：110, 154]。

本筋に戻り翻って考えると，ホージャ・セピー・ハリーファがカーシュガルからヤールカンドにホージャ・ヤフヤーの遺体を運んできて，アブド・アッラー・ハーンがそれをアルトゥンに埋葬したということは，ホージャ・ヤフヤーの宗教勢力とハーン家との間の相互利用的な結びつきを象徴しているのではないだろうか。ホージャ家がチンギス・ハーンの後裔たることを誇るハーン家のカリスマ性にあやかろうとしたとも考えられるけれども，いずれにしてもアルトゥンは聖地としての名声を高めたのである。

おわりに

本稿で明らかにした主要なことを整理し，ホージャ・ヤフヤーの時代の意義を考えて結びとしたい。まず，所謂カーシュガル・ホージャ家(マフドゥームザーダ達)・イスハーク派の始祖ホージャ・イスハークのマザール(墓廟)はマー・ワラー・アンナフルの都邑サマルカンド北郊のバーギ・ブランドにあり，イスハークの長男ホージャ・クトブ・アッディーンの子孫が庭園や地所などのワクフ物件とともにそのマザールを管理していたと考えられる。

次に，イスハークの三男で末子のホージャ・ヤフヤー(ホージャ・シャーディー)は，7歳の時にマー・ワラー・アンナフルからタリム盆地西辺のヤールカンドに来て以来，1645-46年に56歳または63歳で逝去するまで，ヤールカンドを政権の本拠地としたハーン家と結びついていた。例えば，ハーン即位への関与，軍事活動への同行，ハーン家内訌の仲裁に活躍している。

そして死後，ヤフヤーの遺体はヤールカンドのアルトゥンにあるハーン家の墓地に埋葬され，傍らに修道場(ハーンカー)が建てられた。これはヤフヤーとハーン家との宗教面での関係の深さをも示していると思われる。ヤフヤー以後の世代も孫，曾孫が同じ所に埋葬されており，イスハーク派ホージャの墓所としてのアルトゥンはヤフヤーより始まり，受け継がれていったと考えられる。

要するにホージャ・ヤフヤーの時代に，イスハーク派のタリム盆地西辺オアシス地域——特にヤールカンド——における以後の活動を保障する宗教的な基盤が築かれ，政治的環境が確保されたのである。但し，政治上の保障は，ヤフヤーの子の時代になると，この地域をめぐる更なる変動により揺らがされていくことになるが，それについては稿を改めて考察せねばならない。

注

1） 預言者ムハンマドにさかのぼる彼らの血統上の系譜(系図)とその偽作性などの問題点については，嶋田襄平氏や濱田正美氏[嶋田 1952：104-110；Hamada 1978：90-91, 95-97]が詳しく考察している。

2） チンギス・ハーンからの血統上の系譜をひく所謂カーシュガル・ハーン家の始祖サーイード・ハーンが1514年にタリム盆地のオアシス地帯に築いた国家はカーシュガル・ハーン国の通称で知られている。近年，中国の研究者たちはこの国を葉爾羌汗国(ヤールカンド・ハーン国)と命名している。それはこの国がヤールカンドを首都にしたことに基づいている。ソ連邦の研究者においては，史料上に現れる用語によりモグーリヤ Могулия ないしモゴール Могол 国の名が用いられた。[魏良弢 1994：2-6；Yudin 1965：81；Akimushkin 1976：12, note 1]

3） 写本ではホージャ・スィーSī・ハリーファムと読めるけれども，アキムシュキン氏の読み[Akimushkin 1976：256, note 23]に従い，ホージャ・セピー・ハリーファムとしておく。

4） 金浩東氏の研究によると，トゥルファーンにおける伝道活動の際に，そこの聖者 Alp Ata を崇拝していたムハンマド・ハーンと，その崇拝を否定したシュトゥル・ハリーファとの間に対立があり，ホージャ・イスハークの奇蹟を見たムハンマド・ハーンは改悛してホージャ・イスハークの信奉者になった[Kim 1992：16-18]。このエピソードにも現れているように，シュトゥル・ハリーファは師匠ホージャ・イスハークの意向を体現した人物であると思われる。

5） 佐口透氏は，1890年代，1917年代，1857年ころのアルトゥン・マザールの実状や存在を伝える旅行者の資料を紹介している[佐口 1995：109]が，そこにはハーン家やホージャ家への言及は見られない。

6） この文献は菅原純氏のご教示を得て参照できた。記して謝意を表したい。

参考文献

AT：Shāh Maḥmūd ibn Mīrzā Fāḍil Churās, *Anīs al-ṭālibīn*.
MS. Bodleian Library, Ind. Inst. Pers. 45.
Akimushkin 1976：331-334 の校訂テキスト。

TKh：Muḥammad Ṣādiq Kāshgharī (Kāshqarī), *Tadhkira-i khwājagān (Tadhkira-i 'azīzān, Tadhkira-i Jahān)*.
MS. British Library, Or. 5338, Or. 9660, Or. 9662.
MS. Bodleian Library, Turk. d.20.
MS. Institut de France, ms. 3357.
MS. Staatsbibliothek Preussischer Kulturbesitz, Orientabteilung, Ms. or. fol. 3292.

TShM：Shāh Maḥmūd ibn Mīrzā Fāḍil Churās, *Tārīkh*.
Akimushkin 1976：1-122の校訂テキスト.

Abū Ṭāhir Khwāja-i Samarqandī (1965) *Samariyya dar bayān-i awṣāf-i ṭabī'ī wa mazārāt-i Samarqand*. Ta'-līf-i Abū Ṭāhir Khwāja-i Samarqandī, ba-kūshish-i Īraj Afshār. Tihrān.

Akimushkin : Акимушкин, О. Ф. (1976)《Шах-Махмуд ибн Мирза Фазид Чурас. Хроника》. Критический текст, перевод, комментарии, исследование и указатели О. Ф. Акимушкина. Москва.

Akimushkin : Акимушкин, О. Ф. (1984) Хронология правителей восточной части Чагатайского улуса (линия Туглук-Тимур-хана).《Восточный Туркестан и Средняя Азия, история, культура, связи》. Москва, 156-164, 224-225.

Bartol'd : Бартольд, В.В. (1963)《Сочинения》. Том II. Часть1. Москва.

Barthold, W. (1977) *Turkestan down to the Mongol Invasion.* E.J.W. Gibb Memorial Trust, Fourth Edition.

Fletcher, Joseph (1978) Ch'ing Inner Asia c.1800. *The Cambridge History of China.* Vol. 10, Part 1. Cambridge, 35-106.

Golombek, Lisa & Wilber, Donald (1988) *The Timurid Architecture of Iran and Turan.* Vol.2. With contributions by Terry Allen et al. Princeton, New Jersey.

Hartmann,M. (1905) Ein Heiligenstaat im Islam : Das Ende der Čaghataiden und die Herrschaft der Choğas in Kašgarien. *Der Islamische Orient.* Berlin (Neudruck : Amsterdam, 1976), 195-374.

Hamada, Masami (1978) Islamic Saints and Their Mausoleums. *Acta Asiatica* 34, 79-98.

濱田正美(1994) スーフィー教団——宗教権威から政治権力へ, 板垣雄三(監修)・後藤明(編)『講座イスラーム世界2 文明としてのイスラーム』東京, 栄光教育文化研究所, 257-284.

Häsän Abdurehim(艾山・阿不都熱衣木)(1990) *Islam binakarliq sän'iti* (『伊斯蘭教建築芸術』). Ürümchi.

Hedin, Sven(1966) *Sven Hedin Central Asia Atlas.* Stockholm.

Kim, Ho-dong (1992) The Cult of Saints in Eastern Turkestan — The Case of Alp Ata in Turfan —. A Draft Paper presented at the Parmanent International Altaistic Conference, 35th Meeting, Taipei (Republic of China), September 12-17, 1992.

Le Strange, Guy (1966) *The Lands of the Eastern Caliphate.* London, (First Edition : 1905).

McChesney, Robert D. (1990) The Anthology of Poets : *Muzakkir al-Ashab* as a Source for the History of Seventeenth-Century Central Asia. *Intellectual Studies on Islam : Essays written in Honor of Martin B. Dickson.* Edited by Michel M. Mazzaoui and Vera B. Moreen. Salt Lake City, Utah, 57-84.

Majmū'at al-muḥaqqiqīn

MS. Staatsbibliothek Preuss. Kulturbesitz, Orientabteilung, Ms. or. oct. 1680.

間野英二(1983)『バーブル・ナーマ』の研究(I)「フェルガーナ章」日本語訳『京都大学文学部研究紀要』22, 189-347.

Mulla Mer Salih Kashqäri-Haji Nur Haji (1986) *Chinggiz-namä.* Näshrgä täyyarlighuchi : Haji Nur Haji. Qäshqär.

Mullā Mūsā bin Mullā 'Īsā Khwāja Sayrāmī, *Tārīkh-i amniyya.*

MS. Bibliothèque Nationale, Collection Pelliot《B》1740.

Mullā Mūsā-Pantusov (1905)《Таарих-и эмэние. История владетелей Кашгарии. Сочинение Муллы Мусы, вен Мулла Айса, Сайрамца》. Изданная Н.Н. Пантусовым. Казань.

Mulla Musa Sayrami-Änwär Baytur (1986) *Tarikhi Hämidi.* Näshrgä täyyarlighuchi : Änwär Baytur. 北京.

中村廣治郎(1987)イスラームの聖者論 片倉もとこ(編)『人々のイスラーム——その学際的研究』東京, 日本放送出版協会, 199-219.

Pugachenkova : Пугаченкова, Г.А. (1983)《Памятники искусства Советского Союза. Средняя Азия. Справочник-путеводитель》. Москва.

佐口透(1995)『新疆ムスリム研究』東京, 吉川弘文館.

澤田稔(1987)ホージャ・イスハークの宗教活動——特にカーシュガル・ハーン家との関係について——『西南アジア研究』27, 57-74.

Shaw, R.B. (1897) The History of the Khōjas of Eastern-Turkistan summarised from the Tazkira-i-Khwājagān of Muḥammad Ṣādiq Kāshgharī, by Robert Barkley Shaw, Edited with Introduction and Notes by N. Elias. Supplement to the *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, 66(1).

嶋田襄平(1952) アルティ・シャフルの和卓と汗と『東洋学報』34(1-4), 103-131.

清水宏祐(編)(1991)『イスラム都市における街区の実態と民衆組織に関する比較研究』東京外国語大学.

Veselovskii : Веселовский, Н. (1889) Дагбид.《Записки Восточного отделения (Имп.) Русского археологического бщества》. Ⅲ, 85-95.

魏良弢(1994)『葉爾羌汗国史綱』哈爾濱.

Yudin : Юдин, В.П. (1965) Критика и библиография : А.М. Мугинов, Описание уйгурских рукописей Института народов Азии АН СССР.
《Известия Академии наук Казахской ССР, серия общественных наук》5, Алма-Ата, 80-84.

中国伊斯蘭百科全書編輯委員会(編)(1994)『中国伊斯蘭百科全書』成都.

自治区文物普査弁公室—喀什地区文物普査隊(1993)喀什地区文物普査資料匯編『新疆文物(季刊)』1993年第3期(総第31期), 烏魯木斉, 1-112.

(帝塚山学院短期大学)